

氏 名 辺 清音

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2128 号

学位授与の日付 2020 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 神戸南京町 50 年の民族誌的研究  
——包摂的チャイナタウンの生成と変容

論文審査委員 主 査 准教授 南 真木人  
准教授 河合 洋尚  
准教授 太田 心平  
教授 大橋 健一  
立教大学 観光学部  
教授 張 玉玲  
南山大学 外国語学部

(様式3)

## 博士論文の要旨

氏名 辺 清音

論文題目 神戸南京町 50 年の民族誌的研究  
—包摂的チャイナタウンの生成と変容

チャイナタウンは、一般的に華僑が海外で集住する町として認識されている。これまでの日本と欧米におけるチャイナタウンに関する先行研究は、主として2つのパラダイムに分けられる。1つはチャイナタウンを華僑コミュニティとして捉え、華僑にとっての機能や意義に基づいてチャイナタウンを定義するものである。もう1つはチャイナタウン＝華僑コミュニティという考え方を排し、チャイナタウンをホスト社会の華僑/中国に対するイデオロギーの地理的投影の空間と見なすものである。つまり先行研究は、華僑コミュニティにとってのチャイナタウンの経済的、社会的、文化的機能と意義を問うものと、チャイナタウンから反映されるホスト社会の華僑/中国に対するイデオロギーに着目するものに大きく二分されてきた。ただし、何れの先行研究もチャイナというエスニックな側面に重点を置いており、タウンという歴史的、地域的な文脈に埋め込まれたローカルな多様性、およびチャイナとタウンの相互関係を十分に検討する研究は寡聞にして見当たらず、課題として残っている。

こうした課題に取り組むため、本論文は1970年代から再開発されてきた神戸・南京町約50年の変容を事例に、環境整備、イベント創出というまちづくり、店舗経営者の経営戦略と日常的な経営活動を考察することで、南京町におけるチャイナの側面の創出、およびチャイナとタウンの多様性とその相互関係を明らかにするものである。

本論文は、序論とそれに続く6つの章、および結論の合計8章から構成される。

まず序論では、日本と欧米におけるチャイナタウンの実態と概念をめぐる先行研究を整理し、その成果と限界を批判的に検討したうえで、本研究の視座と方法論を提示し、調査概要と本論文の構成を記している。

第1章では歴史文献、地域の様々な記録や資料、経験者の語りを通して、南京町の中華らしい人工環境の基礎が作られた、1970年代～1980年代の南京町商店街環境整備事業の企画と実施の過程を明らかにした。新たに整備された南京町は歴史上の中華市場の複製ではなく、地域の経済振興のために、地元の華僑と日本人経営者と神戸市が協議したうえで、当時の日本人が持つ中国に対するイメージに応じて社会的に生産されたものである。その過程について、主体の多様性、境界の規定、表象の取捨選択の側面から考察した。

第2章では、南京町の主たる管理組織である南京町商店街振興組合が、神戸市や近隣の商業組織などの協力を得ながら、春節祭を創り出して発展させてきた過程を明らかにした。春節祭の年中行事化によって南京町の中華らしさは強化され、それとともに観光化が進んできた。チャイナというエスニックな側面をめぐる様々な自己表象と他者表象が錯綜する中で、南京町組合の経営者、および春節祭を通して南京町とかかわる人々は、自分たちの手作りの街としての南京町に対するローカルな帰属意識を持つようになった。

第3章では、南京町観光案内図などへの中華料理店の明記、食のイベントでの「本物の中華料理」の提供、および中華料理店の看板や軽食屋台における中華料理の見せ方という3つの角度から、グルメ街としての南京町のフードスケープを明らかにした。さらに、中華料理をめぐる日本人のステレオタイプなイメージに寄り添いながら、華僑経営者が本格的な中華料理を探求し提唱するという食文化表象の両面性を論じている。

以上の内容を受けて第4章は、中華料理店の2店舗を取り上げ、店舗の歴史を追いつつ、店主家族の日常的な経営活動と経営戦略に関して厚い記述を試み、個々人が中華らしさを活用し、エスニック・ビジネスの実践をしてきた過程を明らかにした。さらに、エスニック・ビジネスは南京町の再開発とともに発展し、同業他社との競争の中で具体的で差異化する中華らしさを絶えず創出していることを指摘した。他方、エスニック・ビジネスから派生した国境を越えた都市間の往来や地震被災地支援のイベントから、南京町が持つ開放性を検討した。

第5章は第4章と対照する視点から、中華料理店以外の店舗に焦点を当てることで、経営者の間で見られる南京町の占有と管理をめぐる競り合い、彼らの南京町の境界意識の曖昧さ、および新商品開発による多様性の生成を考察し、南京町の包摂的状況を分析した。そこから、南京町は歴史的な継続性のある商店街、便利な都心地域、集客力のある観光地という重層的な側面を持つことを明らかにした。

第6章では、2018年3月～2019年2月に実施された南京町生誕150年記念事業の全過程を参与観察し、神戸市観光施策の変化の中で同事業の企画運営組織の設立と役割、およびイベント内容から見る南京町と神戸という地域社会の連携を論じ、両者の関係性を考察した。同事業の企画運営組織は、南京町組合が持つ地域社会のネットワークを基盤に神戸市の観光政策を活かして作られたもので、多様な参加者で構成される特徴を有する。南京町組合は、神戸市、観光、産業、商業界の人々とともに、南京町生誕150年に関するイベントを創り出し実行するために、人員やアイデア、観光資源を共有した。その結果、南京町では中華らしさと神戸らしさの融合が生じ、南京町以外の神戸各地域への中華らしさの浸透も起こったことを指摘した。

終章では、神戸の都市計画、特に観光施策の変化の中で再開発されてきた南京町における、チャイナというエスニックな側面の創出、およびそれとタウンという歴史的、地域的な文脈に埋め込まれた多様性の結合的な関係を考察した。南京町は異なる時代に開業し、それぞれの経営戦略を持つ多様な業種の店舗が併存する雑多な観光地、商店街である。他方、南京町は中華伝統芸能や中華料理を中心とする創造された「伝統的な」年中行事と、神戸や日本というホスト社会の出来事に対応して新たに創り出されたイベントが開催される舞台でもある。南京町は常に多様な主体の日常的経営活動やイベント参加によって異なる意味が付与され更新し続けている。それにより、南京町は歴史的、地域的な連続性を保ちつつ、震災をめぐる経験や記憶、感情で結ばれ、神戸らしさを柔軟に取り入れる多面的な場所として再構築されてきたのである。つまり、南京町はチャイナというエスニックな側面を強化しながらも、決してそれ以外の要素に排他的ではなく、タウンという歴史的、地域的な文脈に埋め込まれた多様性を取り入れた包摂的なタイナタウンであると結論づけることができた。

さらに、南京町は長い歴史の中で神戸市、市内の観光・地域諸団体や関連企業との間で

ネットワークを構築したことにより、中華らしさと神戸らしさが矛盾することなく融合する場所となってきた。神戸市は南京町を重要な観光資源として捉え、南京町の実環境整備とイベントの創出・維持に経済的かつ人的に深く関与してきた。神戸市のこうした働きかけは、南京町を超えたネットワーク形成に関わり、神戸の他の文化要素が南京町に流れ込む開放性や多様性をもたらしたのである。このように、南京町は神戸という地域社会と共進化する、包摂的なチャイナタウンとして変容し続けてきたと結論づけた。

Results of the doctoral thesis screening

## 博士論文審査結果

Name in Full  
氏名 辺 清音

Title  
論文題目 神戸南京町 50 年の民族誌的研究——包摂的チャイナタウンの生成と変容

出願者である辺清音は、神戸南京町を対象に 1 年 10 ヶ月に及ぶ住み込み調査を行い、南京町がチャイナタウンとして再開発されてきた過去 50 年を、華僑、地元日本人、商店街振興組合や神戸市など多様な主体の意志や行動、関係から論じ詳細な民族誌にまとめた。それによって、中華らしさという記号で満ちたチャイナタウンという中華空間が、それぞれの目的で人々に利用されて、自らの町として取り込まれ、歴史的・地域的な文脈を備えたタウンとして再帰的に生産されていることを明らかにした。

本論文は序論と結論を含めて 8 章からなる。序論では先行研究を、チャイナタウンを華僑集住地と捉える視点と、都市人類学等の空間論の流れを汲む、チャイナタウンを権力や言説が投影された空間と捉える視点という二つのパラダイムに分け検討される。そして両パラダイムで等閑視されてきた、タウンが持つ歴史性、地域性や多様性に着目し、エスニックな中華空間と生活の場であるタウンとの相互関係を明らかにするという研究目的が提示される。

1 章では、南京町という呼称が初めて新聞に現れた 1886 年以降の黎明期、「外人バー」が林立する歓楽街と国際的な市場であった戦後期を史資料でおさえた上で、1970 年代以降の行政による区画整理と地元の店主による商店街環境整備について記述される。日本人を含む店主は、経済振興を目的に南京町を異国情緒あふれるチャイナタウンとして再開発することを選び、楼門などの中華らしい人工環境を整備してきた。そこでは中国の異なる時代や空間の中華らしさが寄せ集め的に採用され、チャイナタウンという中華空間が生産されたと指摘する。

2 章では、商店街振興組合が 1987 年に開始したイベント「春節祭」が扱われる。観光地化した南京町において、春節祭は冬の閑散期に観光客を呼び込むために立案され、中国の春節に倣い龍舞や獅子舞などの中華的伝統芸能が披露されてきた。以来、それは毎年、メディアにより「中国（本場）」「異国」「華やか（華麗）」「にぎやか」等の言葉で報道され、中華らしいイメージが定着してきた。他方、イベントを企画・運営し、龍舞に参加した人々の間では、経験や記憶が共有されて帰属意識が生まれ、チャイナタウンという中華空間を自分にとって意味のある場所として捉える認識が醸成されてきたと論じる。

3 章では、1988 年に始まった「グルメ街・南京町」を掲げるイベント、「中秋節（食宴祭）」（1998 年～）、飲食店の食の様態が記述される。南京町のメインストリートに立地する 99 店中、中華飲食店は 60 を数えるが、そこでは日本人観光客が好む定番の中華料理を提供しつつ「本物の中華料理」もメニューに加え、競合他店との差異化が図られてきたことが詳述される。

このように1~3章では、南京町のエスニックな中華空間が、人工環境、イベント、食を通じていかに形成されてきたかが論じられ、続く4~6章では、エスニックな側面以外の南京町の多様性と変容に焦点があてられる。

4章では、老舗豚饅店と香港式中華料理店を営む華僑店主2名のライフヒストリーを通して、地域を越えた活動が詳らかにされる。阪神淡路大震災（1995年）において避難所で炊き出しを経験した彼らは、東日本大震災（2011年）を機に「KOBE豚饅サミット」という交流イベントを開始し、被災地で豚饅を提供した。こうした活動は被災者としての個人的な経験から生まれたもので、南京町の人々が被災地神戸という地域性を具現化する契機になったと分析される。

5章では、中華飲食店以外の鶏肉店、豆腐店、韓国料理店、アジア食堂、美容室、雑貨店、チーズドッグ店の経営や店主の出店意図、南京町イメージなどが詳述される。辺は南京町の店を悉皆調査し、全212店の内、非中華系の食や商品を扱う店が134店（63パーセント）に上ることを明らかにした。その上で環境整備によるチャイナタウンの外観形成とは裏腹に、南京町は実は雑多な業種の店からなる重層的なもので、それは戦後の市場から発展した商店街という性格を継承すると見る。また都心の観光地でありながら路地も多いという立地が、多様な目的を持つ人々の新規出店を後押ししていると分析する。

6章では、「南京町生誕150年記念事業」（2018年）の運営組織やイベント内容が記述され、神戸らしさと中華らしさの融合が議論される。辺が目にしたのは、南京町とは無縁のように映るジャズ・イベントと「KOBE満腹キッチン」というイベントの対照性である。神戸は日本のジャズ発祥の街といわれ、ジャズは神戸の文化要素とされる。南京町の人々はそうしたジャズのライブを南京町広場で催し、神戸らしさをチャイナタウンに取り込む。一方「KOBE満腹キッチン」では逆に、南京町から離れた会場で中華らしいイベントが催され、中華らしさが神戸の各所に拡散する。つまり、南京町とその中華らしさは神戸の経済と文化を構成する重要な要素と認識され、地域社会に根差していることが論じられる。

終章では、神戸の都市計画のなかでエスニックな中華空間として形成され、観光地として維持・強化されてきた南京町は、多様な業種の参入を受け入れる雑多な商店街としての歴史的な性格を継承し、震災を経験した神戸という地域性やタウンの多様性を柔軟に取り込んだ包摂的なチャイナタウンであると結論づけた。そこには神戸市による区画整理や環境整備事業、イベントへの資金補助等の働きかけが大きく関与し、南京町は神戸という地域社会に根差し、神戸市の都市政策のなかでその発展と共進化してきたとまとめる。南京町の店主は、エスニックな記号や中華空間をイベント創出などの経験を通じて内面化してきたが、それはチャイナタウンという中華空間が人々の行動によって自らの町であるタウンに変質していく過程であると結論づける。

以上のように、辺は都市人類学等における空間論に着目し、地元の人々がチャイナタウンとして生産された中華空間をいかに経験し、自分のものとして取り込んでいるのかを記述し分析した。それによって本論文は、チャイナタウン研究の二つのパラダイムを架橋・接合した研究の新たな道筋を提示し、チャイナタウンはいかにして生まれるのかを明らかにすることに成功している。その際、非華僑など多様な主体にとってのチャイナタウンの意味づけに目配りしたことも本論文の特徴で、それによって南京町の多様性・重層性・包摂性を、説得力をもって論じることができた。都市計画やイベントの創出・運営、多様な

店の経営等から丹念に描かれた南京町の過去 50 年の厚い記述は、本論文を論文題目にふさわしい第一級の民族誌としている。

ただし、商業地としての南京町の性質上、顧客や観光客の視点は不可欠であるが、それが必ずしも十分に研究のなかに取り入れられていないという課題は残る。だが、この課題は今後の研究において発展的に俎上に載せられていくものと期待できる。

以上の理由により、審査委員会は本論文が学位の授与に値すると判断した。